

故評議員桑原隲藏君肖像



の慎重なる用意の程がうかゞはれる。勿論、箇々の點については云ふべき事もあらうが、未だ何人も試みざりしこの方面に開拓の鋤を執り地誌學の體系にふれたる著者の努力に敬意を表し、且つ最近翻譯の地理學書の多き中に研究資料を我が國に取れる独自の有益な研究が現はれたることを學界のために喜ぶものである。著者は東京帝國大學理學部地理學教室に於ける篤學の士である。(菊版六一七頁、東京、古今書院發行、價、五圓五拾錢)(岩根)

彙報

●京都帝國大學文學部史學科 本學年講義題目

國史	國史
講義種別	普通
三浦教授	國史概説(第一學期)
西田教授	國史概説
特殊	西田教授
西田教授	日本近世史の特殊問題
中村助教授	日本中世の古文書
二	二

喜田講師	古代民族史(第二學期)	(二〇)
藤 講師	中世史料の研究	二
三品講師	古代日鮮關係史	二
講師未定	明治維新史	(四〇)
三浦教授	文化の階級性(第一學期)	二
西田教授	日本文化史	一
東洋史		
普通	矢野教授 東洋史概説(第一部)	二
	羽田教授 東洋史概説(第二部)	二
特殊	矢野教授 近代ロシア支那關係	二
	羽田教授 唐代の西域	二
	那波助教授 漢代の文化	二
	鴛淵講師 明代の滿洲	二
演習	矢野教授 東洋史の諸問題	一
	羽田教授 東洋史の諸問題	一
西洋史		
普通	原(隨)助教授 西洋史概説(第一部)	三
	時野谷助教授 西洋史概説(第二部)	一

特殊

濱田教授

羅馬考古學

二

小牧助教授

石器時代の研究

一

矢野教授

近代ロシア支那關係

二

梅原講師

東洋考古學

二

時野谷助教授

三國同盟

一

演習

濱田教授

東洋考古學の諸問題

二

中村講師

清教徒革命と名譽革命
との文化的意義

(110)

實習

梅原講師

考古學實習

二

演習

原(隨)助教授

アテナイの民主政治

二

副科目

史學研究法

原(隨)助教授

アテナイの民主政治

二

中村助教授

古文書講讀

一

普通

西田教授

史學概論

二

福井講師

繪卷物概説(哲學科講義)(第二學期)(四〇)

二

地理學

普通

石橋教授

二

林 講師

日本淨土宗史(哲學科講義)

二

普通

石橋教授

人文地理學概説

二

矢野教授

東洋史籍講讀

一

中村教授

自然地理學概説

二

羽田教授

東洋史籍講讀

一

特殊

石橋教授

生産地理學

二

那波助教授

支那史籍講讀

二

小牧助教授

イギリス地誌

二

宮崎講師

支那史籍講讀(日知錄)

二

小野講師

地理學史

二

時野谷助教授

西洋史講讀 Wartenburg:

二

演習

石橋教授

内外地誌研究

二

小牧助教授

Welgeschichte in Umrissen

二

實習

石橋教授

地理學實習

二

小牧助教授

地理學講讀 Davis: Die erklärende Beschreibung der Landformen.

二

考古學

普通

濱田教授

二

春本講師

地形學(理學部講義)

一

普通

濱田教授

考古學概論

二

横山教授

地質學總論(理學部講義)

三

特殊

濱田教授

羅馬考古學

二

横山教授

地質學總論(理學部講義)

三

金關助教 人類學

二

武家諸法度

大島 三郎

十時講師

露語 {Chekhov 第一回
Gogol 第二回}

二

室町幕府の統制意識に關する一考察

赤松 俊秀

田中教授

羅甸語 Nova Grammatica Latina

二

日本上代の醫術に於ける呪術的形態

金丸 二郎

田中教授

希臘語 Rudimenta Grammaticae

二

王朝前期の社會政策

古住 芳彦

Casco 講師 伊太利語

二

土一揆に對する一考察

森 義雄

小西教授 教育思想概説(哲學科講義)

二

近世初頭に於ける一般町人の趣味生活

澤井 浩三

○地理學及考古學專攻學生ハ人類學ヲ必修トス

◎昭和五年卒業論文題目

京都帝國大學文學部史學科昭和五年卒業論文の題目左の如し。

國史學專攻

中世に於ける支配の觀念(其新興佛教に

於る考察)

池田 修造

武士發生史の研究

池内 義資

王朝初期に於ける精神形態とその性質

西堀 一三

封建制度の成立に關する一考察

清水 三男

我國資本主義思想の發生に關する一考察

下園 盛治

原始神道と呪術

鈴木 讓

大内氏掟書に就いて

田中 達男

近世に於ける學問の新傾向

吉田 三郎

日本氏族社會の崩解過程

高橋 一雄

支那史學專攻

封建制度と支那古代思想（儒家墨家法家思想

についての考察）

藤田 至善

東洋史學專攻

清代史上に於ける滿漢族

岩崎重太郎

胡樂考

内藤 戊申

漢代商賈の研究

中村 信義

西夏建國攷

長部 和雄

漢の初世に於ける對匈奴關係と武帝匈奴

征伐の意義に就いて

李 英 淳

高麗朝に於ける對宋、契丹關係に

就ての一考察

佐藤 一雄

安史の亂に關する研究

内田 吟風

漢代の奴婢制度と其に對する思想

宇都宮清吉

耶律楚材を中心に見たる元初の三教關係に

就いて

山本 守

明代保甲鄉約考

若城久治郎

西洋史學專攻

コンスタンティン大帝による基督教公認以後

約百四十年間に於る埃及教會の民族的發達

（アリウス派異端發生よりモノフィジト異端分

離まで

水川 溫二

アウグスチンの國家思想に就いて

市川 文藏

Alah について

井上千代喜

マルシリヨ・ダ・バドヴァの政治思想に就て

楠 正雄

十字軍時代ベニスの東方發展に就いて

松枝 清重

一九一八年十一月九日

西山 勤二

タキッスの羅馬史觀に就いて

織田昌太郎

Jacob Burckhardt の文化史に於る

岡本 正藏

“Kultur” の理解

清教徒革命發生に關する一考察

佐々木龍作

Niccolo Machiavelli に關する一考察

柴山 英一

ポーランド第二分割に就いて

江坂長四郎

カロリング帝國崩壞に伴ふイタリヤの

歴史的革命に就いて

植杉英之助

地理學事攻

千代川下流砂丘に就いて

朝井小太郎

岡山市の發達

長谷川寛治

若狹地方に於る地形と聚落に及せる其影響

三友國五郎

筑後川下流平野の開発——特に其溝渠を中心と

しての一考察——

米倉 二郎

考古學專攻

彌生式土器を標識とする文化につきて

有光 教一

●京都帝國大學第二十二回夏期講演會

京都帝國大學は學術普及の爲め例年の如く來る八月一日より夏期講演會を開催して一般有志の聴講を許すといふ、講演科目中、史學に關係あるもの左の如し（詳細は京都帝國大學本部に照合すべしと）

天文曆法より見たる支那古代史論

總長 新城 新藏

羅馬法制史

法學部助教授 田中 周友

古代ベルシヤと印度、中世ベルシヤと支那日本

文學部教授 榊 亮三郎

科外講演

ギリシヤ人の見たる理想國

文學部助教授 原 隨園

我が國の上代風俗と印度古典

文學部講師 足利 惇麿

●京都帝國大學名譽教授本會評議員

桑原 隲藏博士計

京都帝國大學名譽教授、東方文化學院京都研究所評議員、本會評議員、正三位勳二等、文學博士桑原隲藏氏、昭和六年五月二十四日午前三時三十八分、病遽かに革まり溘焉として薨去せらる。哀悼痛惜曷んぞ堪へむ。博士は明治三年十二月七日を以て福井縣敦賀郡敦賀町字

蓬萊區に生る。京都府立京都第一中學校、第三高等中學校を経て東京帝國大學文科大學漢學科に入學、二十九年七月十日業を卒へて直に大學院に入り専ら東洋史學を攻く。三十一年八月簡拔せられて第三高等中學校教授に任ぜられ、在任一箇年にして東京高等師範學校教授に轉任、爾來該校に教授たること約十箇年、其間教員檢定委員會委員を仰付けらるゝこと前後八回、又師範學校學科程度取調委員、東京高等師範學校附屬學校國語科實施方法取調委員、圖書目錄編纂委員、明治三十五年度、三十七年度高等學校大學豫科入學者選拔試驗委員會等をも命ぜらる。三十九年十一月文部省より東洋史研究の爲滿二箇年間清國へ簡派留學を命ぜられ翌四十年四月十二日發途備さに支那の文物典章より堪輿風水の末に至るまで研究せられ視察旅行の足跡は陝西省西安府(唐の長安)にまで及び三十九年京都帝國大學に史學科の創設せられ漸く其緒につくや、尙ほ清國在留中の四十二年四月九日に於て京都帝國大學文科大學教授に任ぜられ東洋史第二講座擔任を命ぜらる。同年四月十四日期滿ちて歸朝後は即ち京都帝

國大學の講壇に於て博洽の學識と周到なる用意とを以て講授に従ひ、東洋史の科學的研究の大旗を振はる。四十三年六月、明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條に依り文學博士の學位を授けらる。其の後或は京都帝國大學懲戒委員に、或は同附屬圖書館商議員に舉けらるゝこと數次なり。昭和五年十二月七日還曆の壽に達したるを以て老を告げて辭任せらる。天朝、博士が多年我が學界並に教育界に貢獻したる功績の偉大なるを嘉みして夙に勳二等に叙し之を賞したまひけるが、更に特旨を以て位一級を進めて正三位に叙し、又帝國大學令第十三條に依り、勅旨を以て京都帝國大學名譽教授の名稱を授けたまふ。博士壯年より身を持すること極めて謹嚴、天稟不群の才能と非凡の識見と堅忍不拔の意志と一事を苟もせざる精緻なる用意とを以て夙に東洋文物の科學的研究の必要を唱道せられ、故那珂博士、白鳥庫吉博士等と呼應して我が邦東洋史學樹立の爲に精進せらるゝや、我邦に於ける支那典籍研究の學風漸く舊風蛻脫の傾向を生じ、此の新學風はやがて東洋史學の進歩を促がす基を爲し、明

治三十一年に刊行して初めて世に示されたる『中等東洋史』上下二卷はその裁制の刷新、記述の整正、當に教科用書として我が東洋史界空前のものたるのみならず、海外にも未だ見る能はざる所のもの、實に東洋史學上に一時期を劃したる不朽の名著たり。宜なるかな、その漢譯數種の目ならずして支那に翻印せられたること。就中清の光緒三十四年(明治四十一年)上海の商務印書館より發行せる金爲の譯出せる『東洋史要』と改題のもの最も廣く行はれたり。洽聞卓識に加ふるに科學的研究に立脚せられたる博士の講論は論陣寸隙を除さず、故藤田豐八博士及び白鳥博士等との數次の論諍は精をつくし緻を極めて學界の壯觀と稱せらる。その二十餘年間の鬱然たる著作は片言隻句を苟くもせざるもの、永く金玉の響あり。博士が専ら主力を傾倒したる方面は東西交通史に在り。大正五年『續史的研究』に發表せられたる『張騫の遠征』はその陸路方面に對する若き日の研究の一結晶にして、大正十二年に公刊したる『宋末の提舉市舶西域人蒲壽庚の事蹟』はその海路方面に對する中年以後の研究の一大結晶

たり。殊に後者は大正十五年帝國學士院賞を授けられたる不朽の名著にして、その英文のものは昭和三年に財團法人東洋文庫より刊せらる。題して On P'u shou-king と謂ふものこれなり。此の名著も亦昭和四年に支那に於て漢譯せらる。陳裕菁のものは『蒲壽庚考』と改題せられ南京中國史學會叢書の一として上海の中華書局より、馮攸のものは『唐宋元時代中西通商史』と改題せられ中外交通史料名著叢書の一として上海の商務印書館より、それ／＼發行せらる。博士の令名豈に獨り我が邦に於ける斯界の權威たるのみならず。而して我邦東洋史學の方今の如く進歩し、世界的に盛名を博するに至りしも博士に負ふ所實に甚だ大なるものあること、何人も之を否む能はざるべし。博士また歴史教育が國民精神の陶冶に重要なに、深き思を致され、學術的研究の餘力を以て斯學の普及に努力せらるゝこと多年、方今凡そ教育ある邦人にして博士の令名を知らざる者無く、又其の感化を蒙らざる者殆んどこれ無きは以て其の教育上の功績の尋常ならざるを知るに足るべし。博士天資蒲柳の質、再三大

疾に罹られたれども醫方宜しきを得て皆癒ゆ。又生平保攝に留意せらるゝこと極めて深かりしかば老來愈々體健かに神壯なりしが、過度の研學に精進したるの餘、昭和四年八月二十四日より端なくも二豎の侵す所となり、國手の刀圭一時は病勢大に怠り、復た將來の研究の可能性あるを望ましむるに至る。此の間昭和五年十二月を以て華甲の壽域に達せられしかば友僚門生胥謀りて頌壽記念事業を企て、乃ち寄稿論文四十五篇より成れる『東洋史論叢』と太田喜二郎畫伯の靈筆に成る油畫還曆肖像とを贈呈す。次で博士は老を告げて辭職し、爾來閒地に在りて保養せられしが、本年二月十九日からその感冒より宿痼再發、藥物針石百方及ばず、遂に五月二十四日午前三時三十八分を以て手足を啓かれたるなり。享年六十有二。博士自らを責むるには謹嚴恪勤たれども人を待つには懇切寛大、知友との交際には極めて謙遜鄭寧、門下生の指導には眞摯熱心慈父の情愛に減ぜざりしかば、德望學の内外に高く、計を聞きて哀惜慟哭する者衆口一に出づ。薨逝の訃報 天朝に達するや、畏くも靈前に幣帛

並に祭祀料を下賜して以て生前の偉勳を嘉彰したまふ。

越えて二十六日午後一時より洛東黒谷金戒光明寺本坊に於て終焉の儀式を執行す。東北帝國大學法文學部教官有志、臺北帝國大學內京都帝大文科出身者、京都帝國大學文學部職員一同、京都帝國大學文學部學友會、史學研究會、東方文化學院京都研究所、史學會、京都帝國大學東洋史卒業生一同、三高同窓會、大阪毎日新聞社、東京開成館、小松周治氏、打它宗次氏、田代勘三郎氏、刀根龜次郎氏、淺井政治郎氏、小柴竹虎氏、日高忠男氏、桑原幹太郎氏、坂田直次郎氏、金子秀吉氏、樞尾次郎兵衛氏、新谷與八氏、林竹三郎氏、東助五郎氏、宮元四郎氏、大幸甫外十一氏等より供へられたる約五十基の花環、生花、櫛、果物等は莊嚴に一段の光彩を添へ、故人の聲望の如何に高かりしかを想はしめて哀愁痛惜の懷一入心胸に切なるものあり。讀經の後、京都帝國大學文學部長濱田耕作博士東京帝國大學文學部職員代表和田清學士、東方文化學院京都研究所長狩野直喜博士 東京史學會評議員長坪井九馬三博士、茗溪會總代、京都帝國大學文學部史學科受業

生總代有高巖學士の弔詞あり。喪主武夫氏以下遺族親族の燒香に次ぎて京都帝國大學總長新城新藏博士、同文學部長濱田耕作博士、東京帝國大學總代和田清學士、東文化學院京都研究所長狩野直喜博士、受業生總代那波利貞等の拜禮あり。引き繼ぎ午後二時より一般知友の告別式に移る。會葬者亡慮五百餘名、そゞろに涙の袂をしほりたり。斯くして文勤院謙譽有得居士の英靈は安らけく華藏の寶宮へ首途せられたるなり。茲に履歷の大略、功績の一斑、終焉の大梗を記して以て謹しみて博士の薨去を悼む。濱田文學部長、京都帝國大學文學部史學科受業生總代有高巖氏の捧けたる弔詞は左の如し。(那波利貞謹記)

祭 詞

維昭和六年五月二十六日京都帝國大學文學部長濱田耕作時花一基妙香一炷謹ミテ故京都帝國大學名譽教授文學博士桑原隆藏君ノ靈ヲ祭り且之ニ告ゲテ曰ク君ハ明治二十九年東京帝國大學文科大學漢學科ヲ卒業シ第三高等學校東京高等師範學校教授ヲ經テ四十二年吾カ京

都帝國大學教授ニ任セラレ文學部東洋史學第二講座ヲ擔任シ昨年老テ告ゲ職ヲ退クニ至ルマデ本學ノ爲ニ力ヲ盡スコト二十三年、前後教育ノ任ニ膺ルコト凡三十有四年勤メタリト謂フベシ君天資英邁治聞卓識其ノ學問ニ於ケル精微當ルニ歸シ子弟ニ接スル誘導方アリ著作已ニ異邦ニ流行シテ聲望方ニ東土ニ昭耀セリ今溘焉長逝シ幽明懸隔ス歎悼ノ切ナル哀ヲ舉ゲ一ビ奠ス靈ヤ知ルアラバ斯ノ誠衷ヲ鑑ミヨ

昭和六年五月二十六日

京都帝國大學文學部長 濱田耕作

弔 詞

恩師桑原先生去ル二十四日鷄鳴病遽ニ革マリ忽焉トシテ薨去セラル。哀悼奚ゾ堪エム。越エテ二十六日洛東金戒光明ノ蘭若ニ於テ永訣ノ式典ヲ舉ゲラル。生等當テ先生ノ講筵ニ侍セシ者今此ノ式場ニ陪シテ感慨盡クル所ヲ知ラズ。願レバ明治維新ノ後、世俗一變古ヲ温スルノ風俄ニ止ミ新ヲ求ムルノ俗忽チ盛ニ、朝野泰西文明ノ模倣ニ是レカメ、東洋五千年ノ典章舉ゲデ瓦礫

ニ比セリ。此時ニ當リ先生天稟ノ才能ト非凡ノ識見トヲ以テ夙ニ東洋文物ノ科學的研究ニ精力ヲ傾倒セラレ廣ク内外ノ典籍ヲ比較攻究シ舊來ノ因襲ヲ排シテ考證精緻片言集句モ苟クモセザル森嚴ナル新學風ヲ興シ東洋史學樹立ノ大旗ヲ掲ゲラル。我國ニ於ケル斯學ノ進運是ヨリ頓ニ著シク今ヤ世界ノ學界ニ重キヲナスニ至

レルモノ實ニ先生ニ負フ所大ナルモノアルヲ信ズ。先生マタ歴史教育ガ國民精神ノ陶冶ニ重大ナル關係アルヲ思ハレ斯學ノ普及ニ努力セラルルコト茲ニ二年アリ、方今苟クモ教養アル人士ニシテ先生ノ感化ヲ蒙ラザルモノナキ以テ其教育上ノ功績ノ如何ニ偉大ナルカヲ知ルニ足ルベシ。先生ノ生等ニ臨マルルヤ該博ナル學識ト周到ナル用意トヲ以テ熱心ニ新學說ノ講授ニ努力セラレシハ勿論、常ニ慈父ノ情愛ヲ以テ生等ノ身上ニ就キテモ親シク心ヲ勞セラレ到ラザル所ナシ。生等深ク先生ノ高大ナル恩德ニ感激シ其萬一ニ報ヒ奉ランコトヲ期セリト雖資性庸劣ニシテ未ダ芳志ニ副フ能ハズ。俄ニ幽明境ヲ異ニシテ再び先生ノ警咳ニ接スルヲ得ズ

殘恨胸ニ滿チ悲痛極マリナシ。今ニシテ往事ヲ顧ミレバ景慕ノ情頻ニ臻リ將來ヲ想ヘバ轉タ榮々ノ念ニ堪エズ冀クバ英靈長ヘニ安ラケク永ク在等ニ加護ヲ垂レタマハンコトヲ。茲ニ法筵ニ列シテ哀悼ノ極言フ所ヲ知ラズ、謹ンデ蕪辭ヲ陳ネテ弔詞ト爲ス。

昭和六年五月二十六日

京都帝國大學文學部史學科受業生總代 有高 巖

故桑原隲藏博士略歷

明治三年十二月七日 福井縣敦賀郡敦賀町字蓬萊區(元御手

洗)に生る

同 二十九年七月十日 東京帝國大學文科大學漢學科卒業

同 年同月十一日 大學院入學東洋史を專攻す

同 三十一年八月三十日 任第三高等學校教授

同 年同月 同日 叙高等官六等

同 年十月二十一日 叙正七位

同 三十二年九月二十日 任(東京)高等師範學校教授

同 年同月 同日 叙高等官六等

同 年十月十三日 第十三回師範學校中學校高等女學校教員檢定委員を命ぜらる

同 年十二月七日 師範學校學科程度取調委員を命ぜらる

同 三十三年九月十八日 附屬學校國語科實施方法取調委員を命

同	年十月二日	陸叙高等官五等	ぜらる
同	年同月五日	教員檢定委員會臨時委員被仰付	
同	年同月二十五日	叙從六位	
同	同三十四年一月十五日	圖書目錄編纂委員を命ぜらる	
同	年五月十五日	教員檢定委員會臨時委員被免	
同	年六月二十九日	教員檢定委員會臨時委員被仰付	
同	同三十五年四月十六日	教員檢定委員會臨時委員被免	
同	年五月二十三日	明治三十五年高等學校大學豫科入學者選拔試驗委員を命ぜらる	
同	年六月十二日	教員檢定委員會臨時委員被仰付	
同	年十二月二十三日	教員檢定委員會臨時委員被免	
同	同三十六年一月十三日	陸叙高等官四等	
同	年四月二十日	叙正六位	
同	年六月一日	教員檢定委員會臨時委員被仰付	
同	同三十七年三月二十九日	教員檢定委員會臨時委員被免	
同	年六月十九日	教員檢定委員會臨時委員被仰付	
同	年同月二十七日	明治三十七年高等學校大學豫科入學者選拔試驗委員を命ぜらる	
同	同三十八年四月十二日	教員檢定委員會臨時委員被免	
同	年同月二十日	陸叙高等官三等	
同	年六月二十一日	教員檢定委員會臨時委員被仰付	
同	年同月三十日	叙從五位	
同	年九月十一日	東京高等師範學校評議員を命ぜらる	
同	同三十九年三月二十三日	教員檢定委員會臨時委員被免	
同	年六月十五日	教員檢定委員會臨時委員被仰付	
同	年十一月十五日	東洋史研究の爲滿ニケ年間滿國へ留學を命ぜらる	
同	同四十年三月十八日	教員檢定委員會臨時委員被免	
同	年四月十二日	留學發達	
同	同四十二年四月九日	任京都帝國大學文科大學教授	
同	年同月同日	叙高等官三等	
同	年同月同日	東洋史第二講座擔任を命ぜらる	
同	年同月十四日	歸朝	
同	年六月四日	學術研究の爲出京を命ぜらる	
同	同四十三年五月三十一日	京都帝國大學懲戒委員を命ぜらる	
同	年六月二十九日	京師帝國大學總長の推薦に基づき明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條に依り文學博士の學位を授けらる	
同	年十二月十五日	學術研究の爲上京を命ぜらる	
同	同四十四年二月三日	陸叙高等官二等	
同	年三月三十一日	叙正五位	
同	年十月七日	京都帝國大學附屬圖書館商議委員を命ぜらる	
同	年十二月二十六日	叙勳四等授瑞寶章	
同	同四十五年一月二十二日	京都帝國大學附屬圖書館商議委員を命	

ぜらる

同 年三月二十日 京都帝國大學臨時懲戒委員を命ぜらる

大正五年二月二十八日 叙勳三等授瑞寶章

同 年五月一日 叙從四位

同 七年二月十四日 陞叙高等官一等

同 十年五月三十日 叙正四位

同 十二年三月二十四日 叙勳二等授瑞寶章

同 十五年七月二日 叙從三位

昭和五年十二月七日 依願免本官

同 六年一月十六日 叙正三位（特旨を以て位一級を進めらる）

同 年二月五日 帝國大學令第十三條に依り勅旨を以て京都帝國大學名譽教授の名稱を授けらる

同 年五月二十四日 午前三時三十八分薨去

桑原博士著作年表

自明治二十九年三月
至昭和五年十二月

〔著書名〕

〔發行年月〕

中等東洋史 上卷

下卷

中等東洋歴史地圖

東洋史教科書備考

續東洋史教科書備考

東洋史教授資料

明治三十一年三月

同 年五月

同 三十二年三月

同 三十七年

同 年

大正三年 五月

増補東洋史教授資料

宋末の提舉市舶西域人蒲壽庚の事蹟

東洋史説苑

諸新制東洋歴史教授資料第一輯

論 文（*印を附せるものは其の後増補し）
（て東洋史説苑に收むるものなり）

〔題 目〕

支那の太古に關する東洋學者の所説に就いて

〔掲載雜誌並に新聞〕

三皇五帝の名稱に就き

國民之友二八七・二八八
精美

支那古代の祭祀に就き

史學雜誌七ノ一一・一二

佛教の東漸と歴史地理に於ける佛教徒の功勞

反省雜誌一二ノ三四・七

支那學研究の必要

東亞學會雜誌一ノ一・五

ランスデル氏の支那領中央亞細亞

東亞學會雜誌一ノ三

鐵木眞とコロンパス

東亞學會雜誌二ノ四

老子の學に就きて

東洋哲學五ノ九

釋迦牟尼出世年代考

嶽水會雜誌一

右は史學界一ノ一二（明治三十二年十二月）に轉載せらる

北方佛教研究の價值

嶽水會雜誌二

明の龐天壽より羅馬法皇に送呈せし文書

史學雜誌一ノ三・五

明清時代に於ける支那滞在の耶穌教士 地理と歴史一ノ六・八

韓非子の學說に就きて

東洋哲學八ノ六

六朝隋唐時代の文化に及ぼし、佛教の影響 新佛教二ノ七

漢字に就きて

教育學術界六ノ一・三・五

元時代の蒙古人

明治學報

教育管見

教育學術界一ノ六・二ノ二

消夏漫錄

教育學術界一三ノ六・七

麗山行

燕塵一ノ二

那珂博士を悼む

大阪朝日新聞

入竺求法の僧侶

燕塵一ノ一〇・一一

右は「中外日報」六大新報に轉載せらる

兼豫二州旅行日記

歴史地理一ノ三・四、二ノ一・二・四・六

南京より

燕塵二ノ五

大寶令と唐制

澤柳政太郎氏著我國の教育附錄

山東河南地方游歴報告書

歴史地理二ノ五ノ二・四・六

*西安府の大秦景教流行中國碑

藝文一ノ一

*高岳親王

六條學報一〇四

右は「六條學報」禪宗等に掲載されたれども講演筆記なれば節略、誤謬少からず「東洋史說苑」收むる所は博士の親しく講演を節録せるものなり

清國の京師大學堂

藝文一ノ二

熱河の離宮

藝文一ノ五

*老子化胡經

藝文一ノ九

釋尊の降誕地

佛教講演集一七

佛教と道教との衝突殊に老子化胡經に就き 佛教講演集一七

東蒙古旅行報告書

歴史地理一ノ七ノ一・二・四

觀耕臺

藝文二ノ二・四ノ二

阿部氏に答ふ

六大新報四〇〇

再び阿部氏に答ふ

六大新報四〇四

紙の歴史

藝文二ノ九・一〇

紙業雜誌に轉載さる

*支那の革命

大阪朝日新聞

創建清眞寺碑

藝文三ノ七

*秦始皇帝

新日本三ノ一

*支那人辮髮の歴史

藝文四ノ二

*東洋史上より觀たる明治時代の發展

太陽一九ノ一一

*黃禍論

六條學報一四一・一四三

右は新日本三ノ一（大正二年十月）に轉載せらる

*晉室の南渡と南方の開發

藝文五ノ一〇

*東洋人の發明

中等學校地理歴史教員協

議會議事及講演速記錄

藝文六ノ九

大宛國の貴山城に就いて

藝文六ノ九

宋末の提舉市舶使西域人蒲壽庚に就いて

藝文六ノ九

史學雜誌二六ノ一〇・二七ノ二・二七ノ五

*ネストル教の僧及烈に關する逸事

藝文六ノ一一

「那珂通世遺書」を讀む

史林一ノ一

張騫の遠征

續史的研究

ヒルト及ロツクヒル共譯『諸蕃志』Chao

Ju-Kuan (趙汝适) his Work on the

Chinese and Arab Trade in the 12th

centuries entitled Chuan han-chi (諸蕃志) 史林一ノ二

柯邵丞「新元史帖木兒傳」

史林一ノ二

*支那人の文弱と保守

支那研究

波期灣の東洋貿易港に就て

史林一ノ三

再び大宛國の貴山城

藤田君の貴山城及び監氏城考を讀む

藝文七ノ一・二二

東洋史研究所感

日本及日本人六九六

佐伯君のThe Nestrian Monument in China 史林二ノ一

東漢の班超

大阪朝日新聞

*支那國教としての孔子教

大阪朝日新聞

東京朝日新聞にも轉載せらる

*支那學研究者の任務

太陽二三ノ三

右は漢譯せられて上海の「新青年」に轉載せらる

*支那の國教問題と基督教徒

外交時報二五ノ三

増補「東邊支那記」

史林二ノ三

Sir H. Yule, Cathay and the Way Thither.

New edition, revised throughout in the light

of recent discoveries by H. Cordier, vol I-III.

Malay Society. 1913—1915

東洋史受験者に對する注意

歴史と地理一ノ四

藤田君の「宋代市舶司及び市舶條令」に就て 史學雜誌二九ノ七

カンフウ問題 殊にその陷落年代に就いて 史林四ノ一

*歴史上より觀たる南支那の開發

雄辯一〇ノ五

經子に見えたる宋人

藝文一〇ノ五

*支那人の食人肉風習

太陽二五ノ七

*對支政策管見

外交時報一〇ノ四

十八史略解題

有朋堂文庫漢文叢書

イブン・コルダード・ベリに見えたる支那の

貿易港殊にジャンフウとカンフウに就いて

史學雜誌三〇ノ一・三二ノ一〇

*支那人の妥協性と猜疑心

大阪毎日新聞

上海「新青年」に漢譯掲載さる

史記解題

有朋堂文庫漢文叢書

ラウファア氏の新著『シノ、イラニカ』に就いて 史林五ノ三

(Laufer, Sino-Iranica, pp. 185—630, 1919)

王朝の律令と唐の律令 歴史と地理六ノ五

*支那の人口問題

大阪時事新報

コルゲエ氏の新著『マルコ・ポーロ』を讀む 支那學一ノ九

「亞細亞人の亞米利加大陸發見」は假定にあらず(して)學說(なり)

日本及日本人八二三

弘法大師宗祖降誕記念講演集

(大正十年六月十五日講演) 支那學二ノ二

右は漢譯せられて北京の「現代評論」に轉載せらる

予の孔子觀 斯文四ノ五孔子追悼記念號

支那人を指すタウガス又はタムガツ 史林七ノ四

といふ稱呼に就いて

支那の記録に見えたるイスラム教徒の猪肉食用禁制

* 宦官の話

* 對支文化事業に就ての希望

唐宋時代の銅錢

支那人間に於ける食人肉の風習

陳垣氏の『元西域人華化考』を読む

* 支那史上の偉人(孔子と孔明)

歷史上より觀たる南北支那

白鳥博士還曆記 東洋史論叢

カーター氏著「支那に於ける印刷の起源」

Carter; The Invention of Printing in china, XVIII. pp. 282. 1925.

支那猥談

隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて

新に發見されたカトリック教の宗論 内藤博士還曆祝賀支那學論叢

關係の二史料

舊稿「高岳親王の御渡天に就いて」の後に

大秦景教流行中國碑に就いて

長安の青龍寺の遺址に就いて

國際間の驕兒としての支那

支那の孝道殊に法律上より見たる支那の孝道

坂口博士についての追憶 狩野教授還曆記念支那學論叢

祇教に關する一史料 藝文一九ノ五

應答支那論三則

東洋史の輕視(中等課程改善案の杜撰に就いて)

東京日日新聞

唐明律の比較

ヒルト著西山榮久譯支那古代史

司馬遷の生年に關する一新說

日支の共存共榮に就いて

ゲイニングの「無名のコロンブス」

右は張鄧と云ふ人に漢譯せられて「中大史學半年刊」に轉載せらる

東亞交通史上より觀たる日本の開發 開國文化

歐文著作

On P'u Shou-K'eng (蒲壽庚)

Memoirs of the Research Department of the Toyo

Bunko (The Oriental Library) Tokyo 1928. 昭和三年

西洋史讀書會

例會 四月三十日(木)午後六時半より、新入會者に對

する歡迎の意を含めて、樂友會館第一號室にて開會。參

會者二十名。左の如き研究發表ありて十時半散會。

一、ホツプスの主權論

三回生 千手正美君

一、コッスートの政治

時野谷常三郎先生

例會 五月二十九日(金)午後六時年より樂友會館第一號室にて開く。左の紹介・研究發表ありて後議論百出、

討論に時の過ぐるを知らず、十一時過ぎ散會。參會者二十一名。

J. Macgillivray's Arabic Historians.

岡島誠太郎君

一、古代希臘の社會構成

原 隨園先生

會 報

●會員動靜

●入 會

京都市上京區紫野芝本町二の二〇、澤方 岩田 稔郎氏

同 左京區北船岡町建勳神社前、菱田方 石田太米一氏

同 左京區田中大堰町三二、澤村方 田邊 晃氏

同 上京區一乘寺水千町四、小園方 岩瀬 英治氏

奈良市中清水町 堀内 修氏

京都市左京區吉田上大路町六の一小澤方 丁士 選氏

同 左京區田中里前町二、中川方 宮内 信美氏

京都帝國大學文學部史學科 佐伯 富氏

京都市中京區間之町二條下ル、芝田方 橘 茂氏

同 東山區粟田口三條坊町 山中 次郎氏

同 左京區吉田近衛町十一、小原方 岩城 隆利氏

同 上京區下長者町七本松西入上ル 中川 貞雄氏

(右紹介 島田貞彦氏)

●退 會

佐々木文夫氏

●死 亡

桑原 臨藏氏

右謹みて哀悼の意を表す

●寄贈交換圖書

史潮 一の一 大塚 史學會

史蹟名勝天然紀念物 六の三、四、五 同 保存協會

史苑 五の五、六、六の一 立教大學史學會

言語と文學 五 臺北國語國文學會

史學雜誌 四二の三、四、五 史 學 會

- | | |
|----------------|--------------|
| 國史學 六 | 國史學會 |
| 歷史地理 五七の三、四、五 | 日本歴史地理學會 |
| 考古學雜誌 二一の三、四、五 | 考古學會 |
| 東洋學報 一九の一 | 東洋協會學術調查部 |
| 商業と經濟 一一の二 | 長崎高等商業學校研究館 |
| 青丘學叢 三 | 青丘學會 |
| 民俗學 三の三、五 | 民俗學會 |
| 人類學雜誌 四六の三、四、五 | 東京人類學會 |
| 國學院雜誌 三七の四、五、六 | 國學院大學 |
| 經濟論叢 三二の四、五、六 | 經濟學會 |
| 史迹と美術 五、六、七 | 史迹美術同攷會 |
| 史學 一〇の一 | 三田史學會 |
| 南方土俗 一の一 | 南方土俗學會 |
| 北方郷土 二の二 | 函師郷土研究會 |
| 史淵 二 | 九大史學會 |
| 大谷學報 一二の二 | 大谷學會 |
| 史學 一 | 國立中央大學史學系文學院 |
| 史學標志 二の五、六 | 南京中國史學會 |
| 昭和五年の國史學界 | 筑波研究部 |
| 淺間文書纂 | 淺間神社 |
| 堺市史 八 | 堺市役所 |